View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

ユニバーサルデザインの地域への浸透方策に関する研究 その1

著者名(日)	古瀬 敏, 根本 敏行
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	11
ページ	161-164
発行年	2011-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1132/00000057/

ユニバーサルデザインの地域への浸透方策に関する研究　その１

古　瀬　　敏
根　本　敏　行

ユニバーサルデザインの地域への浸透方策に関する研究　その1

Implementing universal design in the localities Part 1

古瀬　敏
デザイン学部空間造形学科
Satoshi KOSE
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

根本　敏行
文化政策学部文化政策学科
Toshiyuki NEMOTO
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

静岡県がユニバーサルデザインを行政施策の中心の一つとすることを決めてから10年が経過し、浜松市もそれにならうように動き出してきているが、さまざまな努力にもかかわらず、なかなかそれが市民や民間レベルでの実態として地域に根付くまでには至っていない。本研究はそれを推進するための方策を検討するものとして位置づけ、現状評価と将来に向けての方針検討とを行った。

Ten years have passed since Shizuoka Prefecture decided to adopt universal design as a key concept of the local community policy. Hamamatsu City also employed the concept as its policy. However, the progress seems slower than hoped. Present research aimed to grasp the current status, and tried to find proposals for actual implementation of the concept.

1．はじめに

すでによく知られているように、静岡県がユニバーサルデザインを重点事項としてから10年以上経過した。浜松市もすぐそれに続いてユニバーサルデザインを取り入れ、以後静岡県と浜松市は自治体が自ら行えるさまざまな施策（街路や公的建築物整備）については率先して予算を投入するなどして、ずいぶん整備が進んでいる。

たとえば、浜松駅から静岡文化芸術大学があるブロックまでの再開発に当たっては、広々とした歩道の整備も含めてユニバーサルデザインの原則を踏まえる形で施策がなされているし、建築物もよく考えられていて誰もが使いやすい水準になっている。

しかし、ユニバーサルデザインがほんとうに浸透するためには、そういった役所が行うことだけでなく民間における活動にまで理念と実践が波及しなければ意味がない。本学ではこの点を意識しての研究をしばらく続けてきているが、その一環としてできるだけ国際シンポジウム開催などの形でユニバーサルデザインの推進を支援しようとしてきた。

2．国際会議のプレ・イベントでの講演

2010年10月から11月にかけて浜松市アクトシティで「国際ユニヴァーサルデザイン会議」が予定されていることから、そのプレ・イベントとして2009年12月4日と5日に「しずおかユニバーサルデザインの絆in浜松」が、本学、静岡県、浜松市、そして国際ユニヴァーサルデザイン協議会（IAUD）との共催で開催され、講演や展示などが行われた。

このうち講演などは初日に設定され、評論家の樋口恵子氏による記念講演「誰もが暮らしやすい高齢社会への提言」、そして樋口氏に赤池学、原田博子、高野裕章各氏を加えて筆者が司会してのパネルトーク「次の世代に今できること」を設定した。さらに、米国から招へいしたスティーブ・デモス氏（ヒューマンセンタードデザイン研究所）による特別講演「ユニバーサルデザインの来し方、行く末」がそれぞれ行われ、さまざまな試みの成果の評価と今後の方向を探った。

樋口氏には午前中の時間を使って、わが国において少子高齢化の抱える問題をさまざまな角度から指摘してもらった。パネルトークは午後の前半を使ったが、赤池氏からはわが国におけるキッズデザインの全体的な流れなどの紹介をいただき、原田氏からは浜松市と連携しての子育て支援のための実践的活動の報告を、また高野氏からは富士宮市での新たな形での公共交通の仕組みの報告をそれぞれお願いした。子育て支援はどこでも難題となっているが、浜松市においては市役所のWebページからNPOによる支援の

記念講演を行う樋口恵子女史

仕組みにつながるようになっていることからわかるとおり、問題点とその解決方策を行政と市民とがある意味で共有しているところがほかより進んでいるといえる。また、富士宮市では、宮バス、宮タクという愛称を用いて、通例では採算に合わないために公共交通機関が撤退してしまうところを、「交通弱者」をできるだけ生まないために、バスとタクシーをサービス密度に応じて使い分けて、市の予算で助成して採算点ぎりぎりまで引き上げ、しかもほかの自治体で使っている予算に比べると少ない金額ですむようになっているところが高く評価できるといえよう。

こうした地元での実践事例を踏まえての討論では、そういった地道な試みが暮らしやすさにどのように寄与しているかを議論した。全体を通じての議論では、さまざまな主体の参画が重要であること、目先のことのみでなく長期的な視点が必須であること、などが強調された。それは無視されていた利用者を掘り起こして表に出すことを通じて「すべての人のために」の実現に近づくことになるし、また同じような失敗を繰り返さないためにも重要であると指摘された。

海外ではどのように動いているかを知り、地元に反映させる知恵を得ようと考えた特別講演では、スティーブ・デモス氏から、米国におけるユニバーサルデザインのこれまでの到達点と今後の方向性についての報告が行われた。

なお、当初の計画では、ユニバーサルデザインの父と呼ばれていたロナルド・メイス氏とともに米国の動きを主導し、まさしくユニバーサルデザインの母と言うべきイレーン・オストロフ氏を招くことになっていたが、体調不良のために彼女の来日が不可能となったことから、彼女の設立した組織のシニアスタッフであるデモス氏に講演をお願いしたものである。彼の専門分野は都市・建築デザインであったことから、講演のカバーする範囲が意図したものよりは狭く、都市・建築のユニバーサルデザイン中心になってしまったのは、やむを得ないこととはいえ残念であった。

3．地元のユニバーサルデザインの現状とデザインマラソンの試み

講演とパネルトーク以外では、とくに企業におけるユニバーサルデザイン事例を紹介する展示と、ユニバーサルデザインを踏まえての解決策を当事者とデザイナーが議論して提案する48時間デザインマラソンなどが実施された。このデザインマラソンはこれまでもいろいろな機会に何回か実施されているが、本学での開催は初めてで、IAUDが主導して行われた。具体的には会員企業に属するデザイナーたちがグループを構成し、アドバイザーとしてそのグループに加わった「障害を持つ当事者」が抱えている問題点を把握して、それに対しての解答を提案するという仕組みである。今までの殻を破っての発想が求められることから、この手法はデザイナー教育・訓練としてもすぐれたやり方であると認められている。もともとこれが行われていた英国ではデザイン事務所同士の競争というしかけで行われてきている。しかし、最近日本で行われている方法はそれと若干変えて、同一企業のデザイナーたちを複数のデザインチームに振り分け、それぞれのチームの中でほかのデザインチームの発想と思考方法とを学びながら提案を行うようにしている（日本ではIAUD会員である大企業のデザイナーたちが参加することが主で、英国のような専業のデザイン事務所ではないことも理由に挙げられよう）。

議論をして解決案を探っている現場は一般には公開されないが、関係者としてそっと覗いてみると、短期集中決戦の緊張した空気がみなぎっていることがわかる。実施に当たっては本学の学生の数人が作業アシスタントとして加わったが、それが彼らにとってまたとない経験になったのは疑いがない。2010年秋開催の国際会議に際しても同様なデザインマラソンが企画されており、それに本学学生がアシスタントとして積極的に加わることができるよう期待している。大学の講義で説明を聞き、演習の課題を出され、それに対して基本的には自分だけで調べて自分だけの発想で提案を行う、というのはじつはデザインする過程でいえば「真の」ユーザーと向き合うという重要な機会が抜け落ちることが多い。このデザインマラソンという手法は、厳しい時間制約もさることながら、ユーザーと向き合って対話するのが肝要な要素であり、その価値を身体で理解してほしいところである。

4．おわりに

ユニバーサルデザインが地域でほんとうに役に立つため

特別講演を行うスティーブ・デモス氏

デザインマラソンの成果発表の様子

には、使い手との相互のやりとりが必須である。本研究を進めていくに当たって、そうした場をできるだけ提供できるように今後も心がけていきたい。

注記：

本報告は、2009年度に配分を受けた文化・芸術研究センター長特別研究に対するものである。

参考文献

古瀬敏、阿蘇裕矢、根本敏行（2008）ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて、静岡文化芸術大学研究紀要第8巻、pp. 127-130
古瀬敏、根本敏行（2009）ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その2）、静岡文化芸術大学研究紀要第9巻、pp. 125-127
古瀬敏、根本敏行（2010）ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その3）、静岡文化芸術大学研究紀要第10巻、pp. 161-164